

# まちづくり分野で国内初となる ソーシャル・インパクト・ボンドの 導入について



前橋市都市計画部市街地整備課 CCRC・計画推進室室長

瀬瀬 正樹

## 1. はじめに

本市では、民間主体のまちづくりを実現するため、官民で議論を重ねながら、中心市街地の将来像ビジョンである「前橋市アーバンデザイン」を令和元年9月に策定した。

アーバンデザインの策定を契機に、まちを想う個人・法人で構成された完全民間のまちづくり組織「一般社団法人 前橋デザインコミッション（以下MDC）」が設立され、その他にも様々なまちづくりの担い手が誕生している。（「新都市8月号」参照）

現在では、こうした民間の担い手と連携しながらアーバンデザインに位置づけた4つのモデルプロジェクトの具現化に取り組んでおり、ここでは、その1つである「馬場川通り」を対象に、本市が実施した、まちづくり分野では国内初となる「ソーシャル・インパクト・ボンド（以下SIB）」の導入について詳述する。

## 2. 馬場川通りプロジェクト

馬場川通りプロジェクトは、延長約200mの水路及び歩道等の遊歩道公園について、民間資金により民間が再整備を図るといった前例のない取り組みである。

整備資金は、地元企業等からの寄付金約3億円を原資として、沿道の関係権利者と公共用地を所有する本市、そして都市再生推進法人であるMDCの3者で都市利便増進協定を締結し、承認工事として民間による整備後、本市が引き継ぎ、日常管理は地元で行うといったスキームを想定している（図-1）。



図-1 都市利便増進協定スキーム

令和5年度中の完成に向け、MDCではこうしたハード整備だけでなく、食やアートなどをテーマとした新たなカルチャーやコミュニティづくりを目指し、本プロジェクトを企画・運営するメンバーを広く募集した。

その結果、学生を含む若者を中心に総勢137名の準備委員会が組成され、こうした多様な地域人材と地元関係者、商店街関係者等による、ワークショップやまちづくりセミナー、社会実験等を実施している。

今後も、民地を含めた一体的な都市空間の高質化や利活用、維持管理などについて官民で議論を深めるとともに、真のエリアマネジメントを目指すアーバンデザインのリーディングプロジェクトとして推進するものである。

## 3. 行政支援のあり方

馬場川通りプロジェクトには、MDCをはじめ、準備委員会のメンバーや地元関係者が熱意を持って参画しており、遊歩道公園の高質化や整備後の使い方を「自分ごと」として捉え、斬新なアイデアが次々に提案されている。

このような民間主体の取り組みに対して行政支援を行う場合、例えば、これまでの民間団体等に対する補助金や通常の委託業務では、民間の裁量が限られ、デザイン性に優れた計画や斬新なアイデアに制約がかかってしまう恐れがある。

市民の多様なニーズに応え、地域コミュニティの再生やエリアマネジメントの実現につながるためには、民間が裁量を持った新たな手法を見出すことが急務となった。

そんな中、地方公共団体向けの研修会で SIB の仕組みを知り、昨年には国土交通省の支援事業の採択を受けたことが、今回の SIB 導入の大きなきっかけとなった。

## 4. SIB について

SIB の仕組みには大きく 3 つのポイントがある。1 つ目は、業務委託費が成果に応じて変動する契約方式であるという点である。

従来の仕様発注と違い、業務内容の詳細をあらかじめ決めるものではなく、成果目標を定めることで、民間の創意工夫を最大限活用し、事業の質の向上や行政の財政リスクの低減を図ることができる。

2 つ目は、この成果連動型民間委託契約方式に合わせ、事前に金融機関等から資金を調達するという点であり、受託者（サービス提供者）のリスク分散につながるものである。

3 つ目は、評価は発注者である行政のみで行うものではなく、公平な立場の第三者評価機関が関与して実施する点である。

このような特徴を持つ SIB は、海外では再犯防止、国内ではヘルスケアなどの分野において先行事例はあるものの、国内におけるまちづくり分野での実施事例はない状況にあった。

## 5. 本市の SIB の取り組みについて

民間主体で進めている馬場川通りプロジェクトを対象に、地域コミュニティの再生等を目的としたまちづくり勉強会やワークショップ、社会実験等の取り組みを支援するため、令和 3 年 9 月に本市と MDC で成果連動型民間委託契約を締結した。

また、翌月には資金提供者である、第一生命保険（株）とすみれ地域信託（株）の参画が決定し、信託方式による SIB の実施スキームが確定した（図 - 2）。

### 1) 予算及び期間

SIB は、一般的に行政コストの削減や歳入増加といった視点から予算額を決定するものと認識しているが、まちづくり分野では、こうしたコストの算定が難しい。

そのため、既存の補助事業費をベースに、それらを積み上げた額である 1,310 万円を SIB の上限

SIBによる前橋市アーバンデザイン推進事業

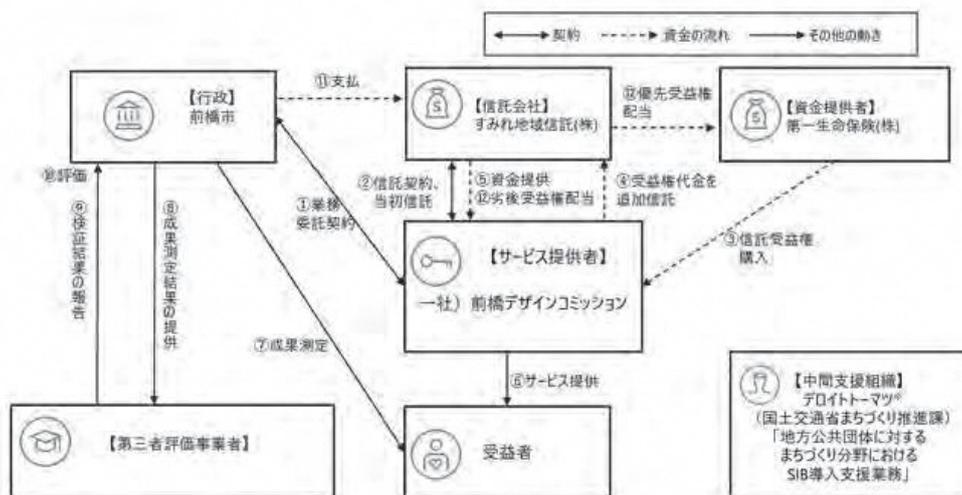


図-2 SIBスキーム

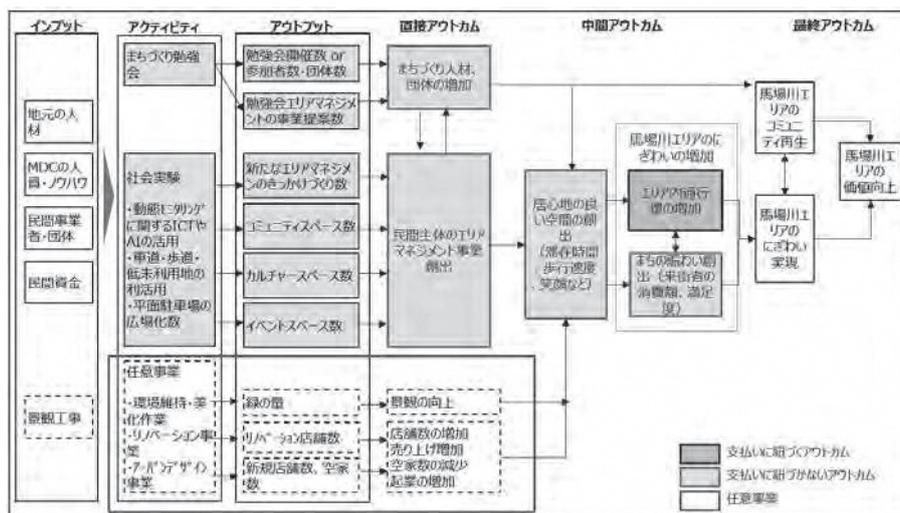


図-3 ロジックモデル

額に設定した。

また、委託期間については、単年度では成果の発現が困難であることや、民間による馬場川通りの整備スケジュールなどを考慮し、議会承認による債務負担行為により、令和3年度から令和5年度までの3年間とした。

## 2) 成果指標の設定

SIBの成果指標の設定は、「ロジックモデル」と呼ばれる、インプットから事業の最終目標となるアウトカムまでをつなげた流れを検討することが必要となる(図-3)。

その際、インプットから考えるのではなく、最終アウトカムや中間アウトカムといった、目指したい目標から遡って考えることが重要とされている。

成果指標の設定やその評価は、測定データの信頼性や妥当性、成果との因果関係が強くなければ関係者間の合意が得られない。

介護予防や医療費削減といった、直接的な因果関係がある場合は分かりやすいが、まちづくり分野では複合的な分野に効果が派生する特性から、より妥当な成果指標を見出すことが難しい面もある。

そこで、過去において集計実績があり、アーケードに設置してあるトラフィックカウンターによる測定可能な「歩行者通行量」を成果連動に紐づくアウトカムに設定することとした。

成果指標として設定した「歩行者通行量」の具体的な数値は、馬場川通りにおける令和3年2月

時点の通行量40,248人/月をベースに、様々な検証を重ね、最終的には令和6年2月時点の通行量が45,915人/月以上(A評価)に増加すれば、満額である1,310万円が支払われることになる。

一方、41,410人/月以下(D評価)となれば、740万円に減額されることとなる(図-4)。

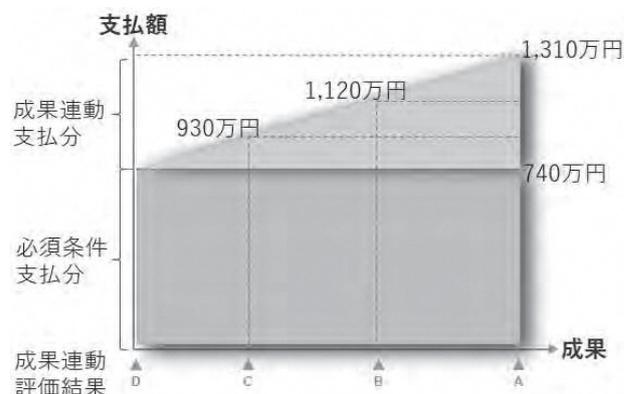


図-4 成果連動支払額

## 3) 支払いに紐づかない評価の実施

まちづくり分野でSIBが普及していない要因の一つは、成果指標の設定の困難さにあると考えている。

そこで、今回のSIBの業務の中で、支払いに紐づかない評価の検証を併せて実施することとした(図-5)。

前橋市アーバンデザインで掲げている「エコ・ディストリクト」という、まちづくりの方向性に基づき、賑わいや便利さという経済価値に加え、居心地の良さや快適さ、健康感といった環境価値における成果指標を想定している。

具体的には、本市及びMDCにおいて、介入エリアの店舗の売上額や、来街者の消費額等を調査するとともに、まちの活動に関わる滞在時間の長さやアクティビティの数なども計測し、第三者評価機関による助言等を受け、分析及び評価を行うものである。

成果指標(案)	本事業期間内で達成すべきアウトカム	測定方法	測定時期	備考
居心地の良さ	居心地の良い空間の創出	アンケート・目測	定期・社会実験	国交省指標関連
来街者の消費額	まちの賑わい創出	アンケート	定期・社会実験	
来街者の満足度	まちの賑わい創出	アンケート	定期・社会実験	
まちづくり活動の開催数	まちづくり人材、団体の増加	実数カウント	勉強会・社会実験	
まちづくり活動の参加者数	まちづくり人材、団体の増加	実数カウント	勉強会・社会実験	
滞在時間	居心地の良い空間の創出	目測 ⇒AIカメラ	2月・7月定期測定 社会実験	国交省指標関連
アクティビティ数	居心地の良い空間の創出	目測 ⇒AIカメラ	2月・7月定期測定 社会実験	国交省指標関連
笑顔	居心地の良い空間の創出	目測 ⇒AIカメラ	社会実験	
歩行速度	居心地の良い空間の創出	AIカメラ	社会実験	
新規出店数、売上高	出店数・売上高増加	アンケート・目測	定期・社会実験	

図-5 支払いに紐づかない評価項目

## 6. 社会実験について

### 1) 取り組み内容

馬場川通りの改修に向け、最初の社会実験を令和3年10月30日(土)、31日(日)の2日間で実施した。

MDC及び準備委員会が中心となり、馬場川通りを一部車両通行止めにして、マルシェやチョコレートアート、あおぞらこども図書館、ペットフォトスポット、ストリートファニチャーなど、多く市民の交流を生み出した。



写真-1 社会実験の様子

### 2) 調査・計測

社会実験では、支払いに紐づかない評価項目について調査、計測を実施した。

AIカメラを4台設置し、歩行者通行量及び歩行速度を計測したほか、アンケート調査等による居心地の良さや来街者の消費額及び満足度、滞在時間やアクティビティの数等の調査も行った。

今後は、これまで人力で計測した滞在時間やアクティビティ数、笑顔の頻度等もAIカメラで測定できるよう、段階的にバージョンアップを図る予定である。



写真-2 AIカメラ分析

## 7. おわりに

今回本市で導入したSIBは、他分野でのSIBに比べて少額であり、試行的な意味合いを持つものであるが、支払いに紐づかない評価の検証を繰り返し行うことで、今後のまちづくり分野におけるSIBの発展に寄与していきたいと考えている。

また、SIBに限らず、民間主体のまちづくりに賛同する市民や企業、民間団体等からの寄付やふるさと納税、出資や融資、あるいはクラウドファンディングなどの「志ある資金」を活用することで、シビックプライドの醸成や地域コミュニティの再生につながると考えているため、今後も新たな仕組みの構築についてチャレンジしていきたい。

(こうけつ まさき)